

見守りと居場所づくり

昨年度の香川菊池寛賞の受賞作「光りの地図」（渡邊久美子作）は、一人暮らしの認知症の母を介護するため、仕事を辞めて単身ふるさとに帰り、最後を看取る男性が主人公の話でした。テーマの設定に今日性があり、身近な話として多くの共感を得たことが、受賞につながったようです。

「介護の2025年問題」というのがあります。最も世代間人口の多い、いわゆる団塊の世代が全員後期高齢者の仲間入りをする年を、いかに持続可能で安定した制度の下に迎えられるかという問題意識です。課題は多々ありますが、高齢者が自分の望ましいライフスタイルを保ちつつ、住み慣れた地域で適切なケアを受けながら人生を全うできることが大切です。そのため、家族、親族、近隣の可能な世話や介護に組み合わせて、地域包括支援センターが中心となり、住まい、医療、介護、介護予防、生活支援などのサービスを一人ひとりの状態に合わせて、切れ目なく効果的に提供していくシステムの構築が求められています。そして、このシステムをより有効に機能させるために、現在、本市が力を入れて進めているのが、「見守り」と「居場所づくり」事業です。

「見守り」は、高齢者の孤立を防ぐ取り組みとして重要です。これまでの民生委員による訪問や水道検針事業者による活動を大幅に拡充して、新聞配達業者や金融機関、宅配事業者など27事業者と新たに見守り活動に関する協定を締結し、約4000人の協力訪問員が確保されています。協力訪問員の緩やかな見守りと民生委員による見守り、それに定期的なしっかりとした見守りの三層構造により、高齢者に対する地域の目を光らせてまいります。

「居場所づくり」は、高齢者の引きこもり防止や健康づくり、生きがい対策として重要です。高齢者の身近な居場所となる拠点を、概ね徒歩圏内で1か所を目安として、市内に300か所程度順次整備したいと考えています。介護予防ボランティアや認知症サポーターなどに、居場所のお世話役となってもらい、高齢者の新たな地域貢献の拠点ともなり得ます。特にU、J、Iターン者も含む多様な能力を持つ元気な団塊の世代の人たちに、大いに活躍していただきたいと期待しています。